

スコープ

士魂商才

株式会社荘内銀行 取締役頭取 町田 睿



旧酒井藩の第十七代当主に当たる、酒井忠明公は書の大家であられる。今般、私は是非にと「士魂商才」の扁額へんがくの揮毫きごうをお願いした。「士魂商才」は明治の初め、近代日本に資本主義を根付かせた渋沢栄一翁が提唱された精神である。

「昔、菅原道真は和魂漢才ということをやった。(中略)これに対して私は常に士魂商才ということをや道するものである」「人間の世の中に立つには、武士的精神の必要であることは無論であるが、しかし武士的精神のみに偏して商才というものがなければ、経済の上からも自滅を招くようになる。ゆえに士魂にして商才がなければならぬ」「やはり論語は最も士魂養成の根底となるものと思う。それならば商才はどうかというに、商才も論語において充分養える」(以上、渋沢栄一著「論語と算盤」から抜粋)

士魂も商才も、双方ともに論語の中にあるというのである。ありがたいことに、わが庄内には「庄内論語」が根付いて久しい。

私の枕頭には、内村鑑三の「代表的日本人」が置いてある。夜半に眼が覚

めて眠れぬ時など、思いつくままに読み返しては、凜りんとして力を得て心安まる。

明治の日本の知性を代表する内村鑑三は、欧米人に向けて英語で本書を著した。日本を、そして日本人を海外に知ってもらうべく、代表的日本人五人を紹介したものである。西郷隆盛にはじまり、上杉鷹山、二宮尊徳、中江藤樹、そして日蓮上人におわる。革命児、改革者を取り上げ、政治家あり、教育者あり、そして宗教人と、多方面の分野における最も代表的な日本人として尊崇の念を込めて描いている。

私は五人に共通するものは高潔の志にあると思う。

市場万能主義の勝利を謳歌うたがするアメリカ主導の新世紀にあつて、他方中国の目覚ましい躍進の足音に響えながら、これから日本はどう歩もうとするのか。

現下の日本をみるに、時代転換の改革期にあるとはいえ、あまりに倫理の紊みだれがはなはだしい。

自らのことではなく、自らの故国日本をも超えて、世界への視野を持った高潔の士こいねがの輩出を希こころうものである。